

アレルギー性紫斑病の疫学調査

(分担研究：小児慢性特定疾患等の疫学に関する研究)

研究協力者：小宮山 淳⁽¹⁾

共同研究者：小池健一⁽¹⁾、北原正志⁽¹⁾

研究目的：アレルギー性紫斑病は多彩な臨床症状と、ときに重篤な合併症がみられる小児科領域の重要な疾患である。本症における病態として、小血管周囲に多核白血球を中心とした炎症性細胞浸潤や血管壁にIgAやフィブリンの沈着が認められることから免疫学的機序が推測されている。細菌感染やウイルス感染などの先行感染がみられたり、薬剤アレルギーや食事アレルギーの小児に本症が発症することが知られている。特にわが国では、溶血連鎖球菌感染が半数以上の例で報告されてきた。本症と同様に、溶連菌感染が発症に深く関与する急性糸球体腎炎やリウマチ熱は近年激減したことから、アレルギー性紫斑病の発生頻度、起因病原体の種類および重症度などは従来との報告とは異なっている可能性がある。

また、本症は小児慢性特定疾患の一つに指定されている。重症例や慢性経過をとる例がどれ

くらいの頻度で存在するのかを明らかにすることは今後の小児保健の観点から重要である。

研究方法：

1) 病型分類

本症小児を

①皮膚症状のみの例

②関節症状、腹部症状や中枢神経症状合併例

③腎炎合併例

に分類する。

2) 本症の発生頻度、合併症の頻度、病因、治療法、予後(特に慢性腎症)を数県単位で調査する。

得られる結果：

これらの結果より、わが国における最新のアレルギー性紫斑病の実態を把握する。これにより、重症例や慢性経過をとるアレルギー性紫斑病小児のわが国全体の推定症例数を求め、今後の小児保健行政に役立たせる。

⁽¹⁾信州大学医学部小児科



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的:アレルギー性紫斑病は多彩な臨床症状と、ときに重篤な合併症がみられる小児科領域の重要な疾患である。本症における病態として、小血管周囲に多核白血球を中心とした炎症性細胞浸潤や血管壁にIgAやフィブリンの沈着が認められることから免疫学的機序が推測されている。細菌感染やウイルス感染などの先行感染がみられたり、薬剤アレルギーや食事アレルギーの小児に本症が発症することが知られている。特にわが国では、溶血連鎖球菌感染が半数以上の例で報告されてきた。本症と同様に、溶連菌感染が発症に深く関与する急性糸球体腎炎やリウマチ熱は近年激減したことから、アレルギー性紫斑病の発生頻度、起因病原体の種類および重症度などは従来との報告とは異なってきている可能性がある。

また、本症は小児慢性特定疾患の一つに指定されている。重症例や慢性経過をとる例がどれくらいの頻度で存在するのかを明らかにすることは今後の小児保健の観点から重要である。